

2022年5月16日

日本の関与の少ない国際会議への参加記

Do what people don't do. Go where people don't go.

群馬大学 小林春夫

何年か前に次の言葉に出会う。

研究は誰もやっていないことをやるのがよい。

「Only one」「総花的ではなく特徴を出す」という表現も同じことを言っていると思う。研究業績で「とてもかなわない」という研究者・研究グループに出会うことがしばしばあるが、「違うことをやっていれば自分に存在価値がある」とも思う。

同様に「日本があまり関与していないが面白い国際学会」に参加すると楽しい経験になる。

(1) 40th IEEE VLSI Test Symposium, San Diego, USA (April 25-27, 2022).

[40th IEEE VLSI Test Symposium 2022 \(tttc-vts.org\)](http://tttc-vts.org)

米国西海岸の San Diego で開催予定であったが、全面バーチャルで開催された。LSI テスト分野で International Test Conference (ITC) に次ぐ、第2の規模の国際学会でこの運営委員を何年か勤めている。今年は IP Session: Innovative Analog Test Technologies を企画・提案し承認された。ADI 社 OB の Dr. Chris. Mangelsdorf, フランス グルノーブル大学 Prof. Salvador Mir グループを招聘した。あちこち声をかけたがこの分野で話しをしてくれる企業・大学研究者が見つからなかったため、もう1件は自分の研究グループから出した。https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/news/pdf/2022/VTSrepo_iimori.pdf

この国際学会では日本からの発表はこの1件だけで、委員も私だけである。(学会のオンラインシステムでの「参加者」には何人か日本人の方のお名前を認識することができた。)このような企画は人脈や技術を広げることができ、なかなか楽しい。

この学会にはこれまで何回も参加してきているが、いつも何か学ぶことがある。発表されている技術内容に加えて、運営の仕方、オンラインシステムについても参考になる。何よりも多くの国・機関の方々が関与しているというところにいるのが心地よい。

日本がほとんど関与していないところに日本人である自分が参加できている、日本の国内学会では得られない経験をしているという充実感がある。以前、研究室の学生の一人が、「日本人参加者のできるだけ少ない海外語学研修に参加すると楽しい」と話していたが、それと同じなの感覚かもしれない。

(2) 11th International Conference on Communications, Circuits and Systems, Singapore
(May 13-15, 2022) [11th ICCAS | Singapore](#)

シンガポールで開催予定であったが、全面バーチャルで開催された。今年はこの学会関係者はシンガポールに関係している方が多いような印象である。私はシンガポールと全く関係していないが、招待講演の連絡がきたので参加した。また初日午前中の Keynote Session の座長も行ったので、真剣に Keynote Speech を聴いた。このうち自分の研究分野(アナログ/ミックスシグナル集積回路設計)での講演が 3 件あった。イタリア パヴィア大学の Prof. Franco Maloberti はこの分野の大御所であり、その研究内容は以前から知っていた。一方、国立シンガポール大学 Prof. Massimo Alioto 中国の電子科技大学 Prof. Qiang Li の講演を初めて聴き、調べてみると「こんなにすごいのか」と気が付く。今回の最大の収穫である。

[Prof. Massimo Alioto \(green-ic.org\)](#)

<https://faculty.uestc.edu.cn/qli/en/index/154298/list/index.htm>

情報は公開されている。が意識しないとそれに気が付かない。

これらの大学からは集積回路分野でアクテブに論文がだされてきているというのは認識していたが、今回具体的に理解できた。以前、何年間か日本のエレクトロニクス関係の電子ジャーナルの編集委員をしていたが、投稿論文は(日本以外の)アジア諸国が圧倒的に多く、そのレベルも年々あがっていることを実感していた。この学会でこの傾向の一端を再認識した。 また自分の招待論文の発表は下記。

<https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/news/pdf/2022/ICCCAS20220512pm1.pdf>

May 13, 2022 | Friday

Time	Arrangement
Chair: Prof. Haruo Kobayashi, Gunma University, Japan	
9:00-9:10	Opening Remarks Prof. Maode Ma, Qatar University, Qatar
9:10-9:50	Speech 1 Prof. Xianbin Wang, Western University, Canada
9:50-10:30	Speech 2 Prof. Massimo Alioto, National University of Singapore, Singapore
10:30-10:40	Group Photo & Break
10:40-11:20	Speech 3 Prof. Qiang Li, University of Electronic Science and Technology of China, China
11:20-12:00	Speech 4 Prof. Franco Maloberti, Univeristy of Pavia, Italy

この学会に参加して次のことが少し実感できたように思う。

「シンガポールは世界中から優秀な人材を確保する。これこそが国力の源泉である。閉じこもった世界では、価値観の多様化は進まない。海外からいろいろな人材を集め、切磋琢磨してこそ、国際的に先頭を走る発想がでてくる。」

(化学系メーカー 経営者)

「シンガポールはホテルのようなところだ」

(大前研一氏)

(iii) 日本の学会誌編集委員での思い出

大学にいと学会(Conference) や学会誌(Journal)の仕事が回ってくる。

国際学会の委員になると、研究室 HP でその学会で論文を募集していることをアナウンスしている。

[Koba Lab Official Page](http://koba-lab.gunma-u.ac.jp)<小林春夫研究室公式ホームページ> (gunma-u.ac.jp)

日本でその学会を少しでも知ってもらおうということでも貢献しようと思うからである。

20 年くらい前に日本のある学会誌の編集委員をしていたことがある。そのとき編集委員のお一人によるその学会誌で「スペースデブリ(Space Debris)」の小特集の企画が承認され、その方が招待論文をその分野の方々にアレンジされいたのを憶えている。そのとき「スペースデブリって何だ」と思ったが、人工衛星等の残骸が宇宙に残され、ときどきぶつかるので危ないということだとわかった。「人類は宇宙まで汚しているのか。学会誌でその特集号が組まれ、自分はその編集委員会の末席にいる」とそのとき思った。